

これと本惣所より多くは度歴止との以加勢として中詰の延
末と敵の旗をも見え玉をひいて近所を略定て上松殿方
へ一歩と進みより以上義光の下知と取りやさんそれ迄
いふ程とむしと甲斐の敵とやうなる扱も危さうき関守衆
併しこの名際の所に対峙せる余片時とて武士たの
甲斐のあつしといふ押込り通ふんとて若者も進み出ると
其中より押込めいふう理ふ屋に各々破れ玉ふ以上
杉方一味同公あつと西沙汰あふと思ふ関東より叩かめ
何の時とあしかに上番所の神と見えたる知の命甲乙
きひく先陣のほかに救多味炮を掛火縄をききたり後

北山より赤とく白旗をあげて風にあらがり木戸の所に救多
の兵卒群がり居たり若し木戸打破んとせし時は打出き
やうに又くうり免る理ふ屋にさけりて故なき乱をもとむる
乃理ふ人とも構りやう名を程に使も山取より海り義光
のひき返りて進みあつと惣所あるもまゝは各別本退
引の所關所を遠通し居る由ちれと惣所ある木戸を
開き通しよりし居れも立寄る番所の神と見え玉城に關
中の謀りあつと水ありとて立寄る處より鉄炮をきくしは
常の様より火縄とくり付又後方の山に掛玉とる旗は
赤き帷子白き帷子とまゝむりて木の枝に結ひ付たり其